
異世界英雄物語

黒崎 達哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界英雄物語

【Nコード】

N8917V

【作者名】

黒崎 達哉

【あらすじ】

避けられていた幼馴染を助け、派手にトラックにはねられた高校一年生の志波大和。

彼は、特別であるが故に避けられていた。

昇天したと思いきや、神様に言われた言葉は

「お前を異世界に送り出す。」

チート能力をバンバン付けられた大和が、異世界にて頑張っちゃったり、傷ついちゃったり、笑ったりしながら生きていく物語。※※主人公最強です。でもそんなぶっ飛んだ最強ではありません。世界

を壊したりは多分出来ませんのであしからず。文才が壊滅的ですが、暇を持て余している方々や、一応目を通してくれる優しい方々。どうぞご覧あれ！

プロローグ（前書き）

修正しました（へーへ）

読みやすくなっていると幸いなんですけど…。

プロローグ

俺は悪いが言っておきたい事がある。

それは人間には、特別な奴らがいるって事だ。

普通人間は、より多くが集まる自分たちの枠からはみ出た物をよく思わない。例えば、あいつは世間的に

オタクと呼ばれるものだとか、あいつは、オカルトマニアでネジが少々飛んでるとか、ニュースで見たあいつは、殺人大好きの狂氣的思考を持ってるとか、同じ学年のあいつは、運動神経がいいとか…。

そんな具体的なモノでなくても、得た事のある、小さな“特別”。

それには良いものも悪いものもあるのかもしれない。

それを得た自分の運命を呪うのかもしれない。

“普通”という、数多くの人間が納まる枠に、自らも身を投じたいと思うのかもしれない。

でも、俺は思うんだ。

確かに、“普通”は無難で、長持ちで、批判されない。

でも裏を返せばそれは、溢れていて、褒められず、他の奴等と一緒に生き様ってこと。

よく言えば、批判されない。
悪く言えば量産型ってことだろ？
他の大半の奴等と同じなんだから……。

どうせなら、ありふれた“普通”より、一握りの“特別”になりた
いと思わないか？

一年に六千万が死に、一億三千万が産声をあげる、この六十九億六
千万の中で。

ゴールは死という思考の切断である、このマラソンを先頭ぶちぎ
って疾走し、誰の目にもくれず個人のやり方でゴールテープを引き
ちぎる。

なんなら、飛び越えてみてもいい。

随分長くなっちゃったが、とにかく、俺はこう言いたいわけだ。

“普通”も別に悪くはないという事。

だけど、嫌われ、疎まれ、けなされ、傷つけられる。

そんな超難関の“特別”マラソン。

素質を持ち、それを、無事駆け抜けられたランナーは、ゴールの瞬
間必ず“普通”よりも気持ちのよく、綺麗で、爽快な光を浴びれる
んじゃないかな……………。

六年二組…志波大和



「ここは、何処だ？」

俺が今立っている場所は、空としかいいようがない場所だ。辺りには雲が漂っており、周囲は青で塗り固められている。陽の光は雲を貫通し降り注ぎ、ありえないほど気持ちがいい。

「ここは、俺の所有空間だ。空ではない。」

（誰だ？）

声の主を確かめるために、俺は後ろを振り向く。

そこに立っていたのは、金髪の男だった。長身痩躯の体に整った美形と呼べる顔。鮮やかな金髪の髪にはウェーブがかかっており、どこか、神々しさを感じさせる。

男は、碧眼をこちらに向けて言う。

向けられた視線は鋭く、僅かながら俺の体は硬直した。

「俺は、現最高神ガリバ。地球と他の異世界五つの生命の管理をさせてもらっている。」

は？

「あんた神様なの？」

「ああ、正真正銘のな。」

「……ちよつと待て、じゃあここは神界とか言っちゃう感じの場所なのか？」

「微妙に違うが、そうとも言える。」

「……なんで俺はここにいの？」

俺は分かっていたが、ちよつとの期待を残し、尋ねる。

「変なこと聞くな？決まってるだろ。」

ガリバはなんでもない風に言う。

「お前が死んだからだよ。」

時は、遡る。

。 。 。 。

志波大和だ。
しばやまと

都内の公立高校に通う俺は、学校が自宅からそこまで遠くないので、基本朝はのんびり。

「今日も学校かゝ、めんどくせ。」

俺は、テレビのリモコンを操作しながら独り言を言う。

「なんかおもしろー事おきてないかな。」

母親は父親と同じ会社で働いているため、両親ともにめったに家にいない。

なので普段は妹と朝を過ごすのだが、今日は部活で早く出た。

突然だが、俺には友達はもちろん、彼女と呼べるものもない。

それは、俺がぞくに普通じゃないからなのかもしれない。

小学生のうちに、中高の理数系は理解し、高校生になった今では、六ヶ国語をしゃべることができる。

成績は常にトップ。模擬試験では全国一位をとり、進学不可高校は一つも出はしなかった。

オール5をとることなんて、グランドキャニオンからバンジーやるよりも楽なことだ。

俺は、高いところがあんま好きじゃないんだよ。

周りも大人になっていくごとに、俺の異常性に気づいたのだろう。

周りの大人たちは、口々に俺を異常な子と言った…。

まあ、俺が子供らしくなかった事も関係したのかもしれない。

真実は噂になり、俺から人を遠ざけた。

俺は、苦い思い出をかみ殺し、無心を気取る。

「そろそろ時間だな。」

俺は、誰もいない家にいつてきますといい、玄関で靴を鳴らし家を出る。

。

。

。

俺の家から学校までは、玄関から出て、右に行くところあるT自路をまた右に曲がり、ずっと行くと出る大通りを渡りすこし歩くというものだ。

三分ほど歩いてT自路を曲がったところで知った顔が、前を歩いているのを見付ける。

幼馴染の江口愛美だ。
えぐちまなみ

黒髪のポニーテールを揺らしながら、眠そうな顔で歩いている。容姿は整っており、美少女に分類されるだろう。

幼馴染と言っても、中学時代俺から離れていった内の一人だ。馴染
みと呼べるモノか：

それにあの時は、泣いた。かなり泣きはらした。

愛美は、俺の初恋であり、大切な人だったから……

でも今では、俺も諦めた。結局俺は一人なんだと。

道も終わり大通りが見えてくる。

信号が青になったので、俺も早足で大通りに向かう。

俺と愛美の距離も短くなる。

俺は、横をスルーしていくつもりである。

徐々に足が疲れを訴えてくる。

そして愛美が信号を渡っていると、一台のトラックが信号を無視し
ているのが分かる。

「えっ？」

愛美が声を出す。トラックに気づいたのだろう。

あれ死ぬんじゃない？

ハハ、ドンマイ。

俺には関係ないし：まあ、来世では幸せになってください。

俺は自分を無理矢理納得させる。

だけど、俺の足は止まらない。止まってくれない。

むしろ、脳はもっと早くと急かしている風に思える。

「ひっ？」

愛美は小さく悲鳴をあげる。

（なんでだよ！俺から離れたんだろ？俺の人生に関わってきてんじやねーよ！）

俺は、心の中で叫ぶ。

目前に愛美が迫る。俺は全身全霊の力で愛美を押す。後先の事など考えなかった。

ただ、助けたかった……。

俺によって突き飛ばされた愛美の体は、信号機のボタンの手前まで転がって行く。

「キャッ！」

ちょっと強すぎたかな。そう思う間もなくボガッという鈍い音がする。内臓を直接殴られたかのような酷い鳴咽感。フッと体が軽くなったと思い、俺は薄目を開ける。すると、トラックと愛美と信号と……。

（ああ、俺…飛んでんのか…？）

（高いところ…苦手な…のにな。）

一秒後、ベシヤ！という音がして何かが地面に叩きつけられる。

「えっ？助かったの？」

愛美は地面に横たわる物体を見付ける。

トラックはタイヤの黒線をアスファルトに描きながら、10 m程行ったところで停止している。

「えっ？何？」

愛美は近づく。単なる好奇心程度の感情。

近付いていくうちに、見えてくる知っている顔。初恋であり、裏切ってしまった人の顔。

「あ、え？やま…と？何で？嘘…？」

その人は頭からは血を流し、体のあちこちに、ガラスは突き刺さり、左足はあらぬ方向に曲がっていた。

愛美はまだパニックった状態で大和に、フラフラした足取りで近づく。

「なん…で。」

愛美はまだ状況を把握していなかった。

頭がこんがらがり意識がハッキリとしない。

大和が声をだす。

「あんま…心配…かけてくれんなよ…？」

それは、2人が仲よかった時、よく大和が言っていた言葉。

大和は二ヘラと笑うとすぐにその表情を変えた…

少し遠くを見つめるような目をした後、大和はかろうじて開けていた薄目を閉じる。

その時、やっと愛美は理解した。

「あああ…いやあああああああ？」

涙が溢れてくる。大和が自分を助けたのだと。そのためにこんな姿に成ったのを。そう理解した瞬間頭が真っ白になり、上手く呼吸が出来なくなる。変わり果てた大和に抱きつき、縋るように泣く。肌につく血液が悲しみを加速させる。

「うぐっひくっ死なっないでよおっやまとお」

「あたしがっ悪かったか…らあまた、ずっと…一緒にいてよお」

瀕死の大和が最後に聞いたのは、救急車のサイレンの音だった。

。
。
。

「まあ、理解出来ねーだろーがな。内臓破裂に背部裂傷やら何やら…。流石に死んじまったな。」

ガリバは言う。

「まあ、他人の運命を捻じ曲げてだけだよ。」

「どういう意味だ？」

「言った通りだ。江口愛美（16）はあそこで死ぬはずだった。トラックにそりゃ綺麗に跳ねられてな。でもそこにはお前という、イレギュラーが存在した。」

「イレギュラー？」
わけが分からん。

「ああ、生命の管理を仕事とする俺が、死に時を間違えるはずがない。ってんでお前という強い存在が自分の寿命を江口愛美にたくしたんだ。まあ、そんな事を出来る人間も限られてるけどな。」

「ふん。」

「何だ？ 全く興味なさそうだな？」

「まあ、言っちゃなんだが、つまらない人生だったし…死んでも生きてても俺に意味なんかなかったと思うしな…。」

「ああ、お前あのまま生きてれば神にもなれてたかもしれないんだぜ？」

「えっ？ ……俺がっスか？」

「そう、お前が。神々の間でも噂になってたんだ。クロノスを超える時空神になるかもってな。まあ、もうなれねーけど。」

マジかよ。

「あれ、じゃあ何でここに連れてこられたんだ？俺以外に誰もいないって事は、普通に死んだ奴がくる場所じゃないんだろ？」

わざわざ死んだ事実を突きつけ、絶望顔を楽しむようなプレイではないはずだ。

「まあな。お前には異世界に行ってもらおうと思ってよ。」

「え？何で？」

意味わかんねー

「地球で殺すには惜しいからさ。言っただろ？お前は神になれたかもしれない器だってな。だから、神々で決めて、お前を異世界に送りだす事になった。感謝しろよ？地球ではもう死んじまったからな。まあ、俺らの勝手な判断だ。行くか行かないかはお前が決める。」

俺はやっぱり特別な存在だったのか。

「愛美はどうなるんだ？」

「普通にお前の寿命の分の時間を消化するだけだな。」

確かに嫌な人生だった。死んでもいいって思ってた。でもやりなおせんなら…。

「行くよ。」

「異世界にいったやるよ。」

俺は言った。

「よく言った。じゃあ今から異世界で生きるための能力を付加する。そうだな…新しく行く世界は魔法が発達してるからな。肉体強化と魔力最大に、あとは特殊スキルもつけとくかな。ランクは5と…。あとは、これとこれもか。」

神がメモ帳を見ながら言っている。

「よし、いっちゃやるか。大和ちよつとこっち来い。」

俺は言われるがままに近づく。

神が何かを言って俺にメモ帳を破いて渡す。

…どうしろと？

「丸めて飲め。」

俺は言われた通りに飲む。

吐きそうになるのを我慢して喉を通過させると、何か暖かさが広がるのがわかった。

「ようし、お前が行くのはガンマインという、世界だ。せいぜい頑張れ。」

そう言って神は、腕を軽く振る。

俺の横に扉が出てきた。

俺はそれを開け、中に入る。

「あっそうそう、言っておく事があるわ。」

神が俺の目を見て言う。

遅いが神のくせにチャラチャラした奴だと思った。

「お前は確かにあの子の特別だったぜ？」

「そりゃどうも！」

俺は勢いよく扉の中に入っていく。

あんなお節介ができる神も中々いないと思った。

一人しかいなくなった空間で神は、独り言を呟く。

「頑張れよ、大和。」

プロローグ（後書き）

随分長くなっちゃいました（――；）

初の異世界ものなんですけど、上手く書けません。

まあ、完結はさせたいと思っているのでよろしくお願いしますm（

――）m

第一話グリズリーと美女

「は？」

俺は神域で神に力をもらったあと、異世界に行くため扉を開いた。そこまではいい。問題は今の状況だ。扉の先にあった風景。地上1km地点。

「うおおおおあああー！」

超高速で落下する俺。なかなかイケてる？
ってそうじゃなくて！

（ヤバイ！こんな速度で落下したら絶対愉快的な肉片になる！それこそトラックなんか目じゃねーよ？）

俺は自分の想像に寒気がした。

（いや、落ち着け俺！俺は天才だ？考えろ！考えろ！考えろ。何を？空中からの高速落下の対策なんか考えられつかよ！てか天才とかこの際関係ねーだろ？）

俺が一人で考えていると、下になっていた頭が急に上がる。

（浮いてる？……なるほど神か。）

俺はガリバがやったんだと思った。

（フハハ、高さなんぞ恐るるに足らんな！）

地面に近い、あと10m程だろう。

とか思ってたらいきなり浮遊感が無くなった。

「うわっ?」

バキバキと木の枝を折りながら落ちる。

「最後まで面倒見ろや!」

別に痛くなかったのだが、声を張り上げ言う。

落ちた俺は辺りを見回す。木々が連なっているところを見ると、森か林だろう。俺は辺りを散策してみることにした。

「ん? 何か音が…。」

近くで音がする。身体能力強化で聴覚が発達している俺は何かを聞き取った。

ウウオーン

(獣の声?)

俺は声のする方に歩いて行く。

そして近づくにつれ、人の声も聞こえることに気づく。

人がいる事に気づき走り出す俺。

(まずこの世界の事について教えてもらおう。)

そう思った俺は一直線に声のする場所に向かう。

着いたのは走って40秒の場所だった。着いた俺は木の陰から様子を窺う。

まず目に入るのはでっかい熊。周辺の木々はなぎ倒され、刻まれている爪痕からそいつの猛々しさが伺える。

（なんか全然怖くねーな？）

俺はおかしいなと首を捻る。

そして、人はどこかと視線を巡らす。すると確かにいる。熊と対峙しており、何かを言っている。

「あたしはあんたなんかには殺されない！」

そう言いながらも肩を震わしている。どうやら女性の様だ。熊は言葉の意味が分かったのか、腕を振り上げた。

女性は覚悟を決めたのか目を瞑る。

俺はそういや腹が減ったなと思った。

（貴重な情報源！死なせはせんよ！）

俺は高速で移動し女と熊の間に立つ。熊の手が襲いかかってくる。

俺はそれを片手で止め、握る。

熊は突然俺が現れた事と、自分の攻撃を簡単に止められた事に驚き、バックステップしようとしたが俺が握っているので離れない。

俺は後ろを振り向き女の顔を見る。鮮やかな水色の髪は腰あたりま

でのぼしており、顔はこの世のものとは思えない程整いきっていた。
(おっおお…。)

思わず凝視してしまった。

俺は驚愕に染められた女の顔を見て言った。

「美人さん、こいつって食える？」

とにかく腹が減ってたんで……。

「えっ？ え、ええ一応食べれるわ。」

美人さんは親切に教えてくれた。そして喰えることを知った俺は早速この熊をぶっ殺してやることにする。

再度放たれた爪アタックをよけ、顎を蹴り上げる。サッカーボールのように愉快に飛んで行く熊をジャンプで追い越し、かかと落としを食らわしてやる。

派手な音を立て、地面にクレーターを作った熊の上に降りる。

見てみるともう死んでいるようだ。俺が熊に近づきどう調理しようか考えていると。

「ねえ。」

そこで美人さんが話しかけてきた。

俺は体のむきを変え美人さんと対面する。

「何？」

「助けてくれてありがとう。あたしの名前はシャリウエル、シャリウエル・ローズ・アルガータ。よかったら名前を教えてください。」

「志波大和だ……。ヤマトでいい。よろしくなシャル。」

「ヤマトって不思議な名前ね。それとシャル？」

「ああ、ただの愛称だ。」

「ふーん。シャルね。うんいいわ、よろしくヤマト。」

俺たちは握手をかわす。

「ところでシャル。これって生でいけんの？」

「は？」

森にシャルの疑惑の返答が木霊した……。

第一話グリズリーと美女（後書き）

くゝ（一。一；

思ったより難しいです（^。^）

まだ未熟ですが出来るだけ読みやすいようにしたいと思っています
んで引き続きよろしくお願いしますm（
|
|
）m

第二話シャリウエル視点(前書き)

お気に入り登録を下さった方、評価をしていただいた方々ありがとうございます。

文才はないですが出来るだけおもしろく、読みやすくしようと思いますので、よろしくお願いしますm (´`´´´) m

第二話シャリウエル視点

“ シャリウエル視点 ”

「水をこの手に。アクアストーム！」

コルンの森で危険指定されているグリズリーマザー。その体を水が包み渦を巻きながら上昇する。

5 m程上がった所で水が弾け、辺りに水が飛び散る。

「やった？」

そう思ったのもつかの間。グリズリーマザーが雄叫びをあげながら襲いかかってくる。突進をかううじてよけたあたしは、グリズリーマザーの後ろに回り込む。

「ハアハア。」

勝てないと悟った。今現在シャリウエルはとある事情で魔力濃度が薄まっており、そのせいで魔法に威力が出ないのだ。

魔力濃度とは魔素の濃さであり、濃ければ濃いほど魔力の性能が上がるというものである。

あたしは後ろに回り込んでも動くことが出来なかった。魔力と体力の限界である。

だけどあたしは振り向いたグリズリーマザーに言う。

「あたしはあんたなんか殺されない！」

グリズリーマザーの目があたしを捉える。四肢が硬直する。頭が冷えて吐き気がする。勝手に体が震える。

そしてグリズリーマザーが手を振り上げた。

「！！」

目を閉じる。

……何秒経ってもいっこうに衝撃はこない。
おかしいと思い目をあけてみると。

黒髪黒目の青年が立っていた。顔立ちは整っており、男にしては長い髪もあいまってクールな印象をうけた。グリズリーマザーの攻撃を片手で止めており、顔をこちらに向けている。その異様な光景に息を呑む。

だが、青年が発した言葉はあたしの予想の遥か斜め下をいった。

「美人さん、こいつって喰える？」

食えるって……グリズリーのこと？

「え？ え、 ええ一応食べれるわ。」

あたしが混乱していると、瞬く間にグリズリーは沈められてしまった。強い……。

青年は倒したグリズリーに近づき品定めをしているようだ。

あたしは助けてもらったお礼を言おうと彼に近づいていった。彼ならあたしを助けてくれるかもと、淡い期待を抱いて…。

第二話シャリウエル視点（後書き）

第一話でシャリウエルの心情が分かりにくかったかなと思いましたので、書いてみました、シャリウエル視点です。

一応後への布石も作っておいたので、ちゃんと読者さんが読みやすいように工夫していけたらなと思っています（^^;;;

第三話 森に来た理由

俺はあの後、熊肉を焼いて食べた。因みにシャルが魔法で焼いてくれた。

俺はまだ魔法の使い方を知らず、シャルには事情があって今は使えないということにした。異世界人と言っても理解されなさそうだからだ。

そして、満腹になった今シャルと対面し話を聞いている。

「つてことで、この森は今、安全とは言えない状況なの。」

シャルがいうには、この森はつい最近までは安全で、魔物もそこまですぐで凶暴ではなかったらしい。グリズリーも他と比べると好戦的だが、みさかいなく襲うというのはないようだ。因みにさっきの魔物はグリズリーの長のようなもので、グリズリーより力が強く魔法に対する抵抗が通常より、高いらしい。

「ちょっと待て、じゃあ何でお前ここにいるんだ？ 森の状況も知ってて、危険だと分かってたんだろ？」

「そ、それは…。」

「話したくないなら仕方ないけど、悪いようにはしないぜ？」
そう言って微笑む。

これは安心させる為だ。何かは分からないがシャルには、この森に

くるための理由があったのだろう。それこそ、自分の命をかけるくらい大切な。口ぶりからすると、この世界では身分は高そうだし、仲良くなっていて損はないだろう。

シャルは顔を僅かに赤くしながらいった。

「まあ、話そうと思ってただけだね。あたしは貴族なの。侯爵家の娘。」

「侯爵って第二位の？」

「そうけど？」

どうやら爵位は一般的なもので、日本華族などと同じものようだ。

「まあ。それで17歳にもなったし、婚約相手がいたあたしは結婚をしろって言われたわけ。あたしは結婚とかまだ早いと思ってたし、何より、婚約相手のことあんまり好きじゃなくてね…。」

シャルは目をそらしながら言う。

「あたしは世界中を見て回りたいの。この世界にはまだ、あたしの知らない場所や、知らないことが、いっぱいあるはずだから。そのためには、まだ結婚なんてしたくないし、するわけにはいかない。…そういった事を親にも言っただけだね。」

「ふーん。それで？」

「条件を出してきたの…。このコルンの森の泉にある、クリスタルをとって来たってね。そしたら一人前になったってことで結婚はまだしないでもいいって…。多分、森の変化もあって、あたしが行かないと思ったんでしょ。」

「なるほどね。……それって一人でとってこいって言われたの？」

「いや、別に言われてないと思うんだけど。今の森が危険って事はみんな知ってるからね。ついてくる人なんていないのよ。」

なるほど。

「俺と一緒に行ってやろうか？」

「え？ほんと？…いや、いいわ。あぶないもの。」

「お前も危ないんだろ？正直放っておけねーよ。」

「でも…。」

「じゃあこういうのはどうだ？俺がついて行ってやるかわりに、俺の質問に3つ…いや5つ、何も聞かずに答えてくれ。」

「質問…スリーサイズとか？」

「それも聞きたいが違う。…まあ、聞くのはお前についてじゃないから安心しろ。」

もちろん、この世界についてだ。いくら地球じゃ天才だとか呼ばれていたとしても、この世界については何も知らない。常識知らずだ。

「まあ、あたしとしては願ってもない提案だけど…本当にいいの？」

「ああ、女の子を一人で危険な目に合わせられないだろう？
ちよっとキザだったかな…。」

「そう…ありがと、ヤマト。」

シャルは顔を赤くして言う。
可愛いすぎ！

なんだか俺まで恥ずかしくなってきたので、目をそらしながら言う。
「それで泉ってどこにあんだ？」

「ああ、ここから半日ぐらい歩いた所よ。」

……一つ言わせてもらう。

「遠すぎだろ……。」

俺の呟きはどうかやらシャルには聞こえなかったようだ。

第四話 結晶の泉

シャルと俺はあれから少し歩いたあと、野宿をする事になった。因みに晩飯はグリズリーを食べた。意外に美味しいのだ。

この世界でいう、マキのような物を燃やし、焚き火を起こす。雑談をしていたのだが、シャルは疲れていたのか、すぐに眠ってしまった。

「ふー、それにしても本当に異世界なんかに来ちまうとは……。」

（俺はこれから何をして生きていけばいいんだろ……。）

そんな事を考えていた俺は、ある事を思い出した。神にもらった力の事だ。

メモ帳を飲まされたからか、わかる事がある。

身体能力強化。

これは頭の中でスイッチのON、OFFのようなものが出来るらしい……。基本的に戦闘状態になると勝手にONになるらしいのだが、努力すればストッパーのようなものを身につけることも、可能だという。

あと多大な量の魔力と、魔力濃度の高さ……。なぜか魔法の使い方が分かるというオマケ付き。

この世界で魔法というものは一般的に使われているものらしい。

他にも、3つ貰ったらしいのだが、その内の2つはまだ使えない、努力しろということだろう……。

3つの特殊能力の内ゆういつ、使う事が出来るのは一つだ。

ふう、と息をついた俺はシャル同様寝ることにした。シャルが探知型のバリアを張ったと言っていたので多分大丈夫だろ。

それに、魔物に寝てるところを襲われてもシャルはともかく、俺は死ぬ気がしない……。

「なんだか俺が俺じゃないみたいだな……。」「俺は、独り言をぼやき目を閉じた。

。。
翌朝起きた俺は、まだ寝ているシャルを起こさないよう、魔法の練習をしてみる事にした。

俺が知る限りでは、魔法の発動しかたは3つある。

まずは、初歩である詠唱魔法。これは魔法によって定められた言霊と魔力を使い、魔法を発動するというものだ。

次に陣魔法。事前にセットした魔方阵や、魔法文字に魔力を込めておき、術者が魔力を大小送り込んだりする事で、魔法発動。

最後に詠唱破棄。

これは、感情の爆発や、生命的な危機で発動したり、熟練者は使えたりなど、あまり知られていない。

俺は枝を指で指す。

「エアー。」

無数の空気の刃が枝を切り裂く。

「初級魔法でここまで危険なのか……。当面は肉弾戦でいくかな……。

」
その後も初級魔法など、さほど破壊力がないものを練習した。

もといた場所に戻ると、起きていたシャルが、櫛で髪を整えながらこちらを睨んできた。

「どこ行ってたのよ…。」

なんか怒ってるっぽい。

「ちよっと散歩をな…」

「見捨てられたかと思ったわ…。少しくらい声をかけてもいいんじゃない？」

「悪いな…でも気持ちよさそうに寝てたからさ。」

そう言うと、シャルは拗ねたような顔になり話し始める。

「しょうがないから許すわ。次からちゃんと声をかけるように。」

俺は、分かったと返事をする。

「昨日も言ったわよね？クリスタルがあるのは、歩いて半日の結晶の泉。その道中は魔物も出るし、気を引き締めなきゃダメよ。」

それからシャルは話し続ける。

話しによると、シャルは普通の人よりも魔法は使えるらしい。それ

こそ、苦戦はするがグリズリーを倒せる程。

なぜ苦戦していたかという点、特異体質のせいで、魔力も多く濃度も十分あるシャルは、他の人と違い、一ヶ月の内一日だけ魔力濃度が大きく変わるといふ。濃くなる日もあれば薄まる日もあるといふのだから使い勝手が悪い。

「まあ、調子はもどったんだし、ヤマトもいるしこれならクリスタルもとってこれるわね。」

ああ、因みに俺は駆け出しの旅人という事にしといた。

「じゃあ行きましようか。」

シャルが歩きだしたので俺はそれに着いて行く。

道中は魔物も出たが、全てそこまで強い個体ではなかった。

「着いたわ……。」

シャルが立ち止まり木々の向こう側を指さす。

「やっとか……。さすがに疲れたぜ。」

泉の前まで来た俺は、疲れていたのにもかかわらず、かなり驚いた。

「驚くのも無理ないわ。すごいでしょ？ 結晶の泉は。」

結晶の泉は俺が思っていたものより大きかった。真ん中には小さな島があり、そこにはかなりの数の結晶があった。

それらにも驚いたのだが、一番はやはり、綺麗なところだろう。青色に澄んだ泉は、日の光や周りのものを反射させ、キラキラと輝い

ている。」

俺は泉から目をそらしシャルを見る。

「綺麗なところだな。…それで、結晶はどうやってとるんだ？」

陸から小島までは少なくとも10m以上ある。

「泳いで行くつもりだったんだけど、ヤマトがいるしね…。悩んでるところ。」

俺がいたら、困るのか？

…ああ、そりゃそうか。

「じゃあ俺がとってくるわ。」

俺はそう言って準備運動を始める。

「どうやって？泳いでいくの？」

「いや、ジャンプして…。」

「……無理よ。」

「そうか？まあ、試して無理だったら泳ぎって事で。」

俺は頭の中でイメージする。ONOFFのスイッチを…。イメージしたのは、電気のつけ消しを行うスイッチ、それをONにする。

頭の中で“カチ”という音がし、体が軽くなる。どうやら成功のようだ。

俺は足に力を入れ飛ぶ。軽めに飛んだつもりだったのだが、小島を
超えそうになった…。

島に着いた俺は、小さいクリスタルを一つ持ち、元いた場所に戻る
ためまた飛ぶ。

「ヤマト…：あなた人間よね？」

クリスタルを手に持ち帰還した俺に、シャルが言う。

（それは俺も大いに疑問だ…。）

シャルの疑問に心の中で答え、俺はクリスタルを渡した。

第五話 転移魔法

クリスタルを無事入手した俺らは、また帰るために歩き出す。

「めんどくせー。もう歩きたくねえ。」

「しょうがないじゃない。他に方法が無いんだから。」

「方法か、方法うゝん方法。そうだ、移動したりする魔法は無いのか？」

「あるにはあるけど、使えないわ。」

「え？あんの？」

「知らないの？転移魔法や飛翔魔法の事よ。魔力で体を浮かせたり、物体をA地点からB地点まで移動させたり…。まあ、使えるのは熟練者や天才って呼ばれる魔法使いや、魔人だけね。」

魔人とはこの世界にいる種族のことだ。人間と魔人の他に獣人といったものも存在する。魔人はその名の通り、魔法に長けた種族。獣人は身体能力が高い。

「転移魔法に飛翔魔法ね。」

俺は記憶を漁る。おっ、あったし……。

「俺転移魔法使えるわ…。」

「え？」

「うん。」

「嘘でしょ？ほ、本当に？……あんた本当にただの旅人…？」

俺は誤魔化すために喋り始める。

「それでこの魔法、最近見た場所にしか行けねーんだ。…シャル、俺らが初めて会った場所から、お前が住んでる場所まで、どんぐらい時間かかる？」

「あそこは街からは近いわ。二時間程で着くはずよ。」

じゃあ転移魔法使った後は、あの方法で行こう。

「シャル、近くに来てくれ。」

「なんで…？嫌よ…。」

「お前の中で俺のイメージどうなってんだよ…。転移魔法使うのに必要なんだ、手に触れるだけだし、いいだろ？」

シャルが近づいてくる。俺はシャルの手をとる。真っ白でスラリと
していて柔らかい…俺は一瞬硬直してしまった。

「な、何よ？」

「悪い、何でもない。」

そういつて俺は詠唱を始める。頭の中にある文を吐き出す。

「——動けぬ物、その物の望む場所へ。座標をかえよ、テレプ

オート。」

シャルと会った場所をイメージし、俺を通じてシャルにも魔力を通す。俺たちを光が包む。だがそれも一瞬の事で、瞬きをする間もなく景色が変わる。

。

。「ふう、どうやら成功したらしいな。」

そういい、俺は手を離す。

「転移魔法って便利なのね…。」

「確かにそうだな。でもここから二時間だろ？シャル、街ってどの方角なんだ？」

「あっちよ。あと二時間頑張りましたよ。」

ふーんといい、俺はシャルを前に抱きかかえる。いわゆるお姫様抱っこの形だ。

「きゃっ！な、なに？／＼／＼／＼／」

きゃっ！だってよ。可愛い声出すじゃねーか！

俺は頭の中のスイッチをONにし、シャルが指差していた方向に全速力で走り始める。

立ちはだかる木や岩は全てよける。魔物にも会ったが完全無視。

そうして走っていると森の終わりが見えてきた。街に着いたのだろう。かかった時間は僅か十分。疲れは無い。

俺の全力疾走は完全に生物を超越したモノだった……。

第五話 転移魔法（後書き）

長かった森。だけどそれも今回で終わり！
読者の皆さん、次回からはちゃんとやりますので、どうかまだ見捨てないでください！。・。（ノム）・。・。

第六話

シャルの親父は意外に優しい…？

森を抜けようやく街が見えた。俺は放心しているシャルをおろした。シャルはそのまま地面に座り込んでしまう。

街には門のようなものがあり、門番らしき人物が二人、だらけたように門に寄りかかっている。

街に入ろうとしてる人たちは何か、カードのようなものを門番に見せている。

「なあシャル、街に入るのに何か通行証とかいるのか？」
俺は放心したままのシャルに話しかける。

「シャル？おゝい。」

目の前で手を振る。

「聞こえてるわ……それよりなんて事してくれんのよ…。」

「まあ、いいじゃねーか。こんなに早く街に着けたんだし。」

「それでも突然あんな……こ、腰が抜けちゃったじゃないの！」

どうやら超高速ヤマト号はおきに召さなかったらしい。

「それで？なんか見せなきゃいけないのか？」

「それでって何よ!もう……別に大丈夫よ。あたしのツレって事にすれば。」

「そうか、じゃあ早く行こうぜ。腹が減っちゃった。」

そうして俺は歩き出す。

「ちょっと待って!」

「なんだよ?」

「いや、だから……。」

「ああ、腰が抜けて歩けねーのか。」
しゃがみこんだ俺はシャルをおんぶする。

やっぱ軽いな…。

シャルはなにも言わずに俺の首に手を回す。背中に当たる感触に俺は悟りを開く事を、余儀なくされた。

抱っこしたまま、門へと近づく。

シャルは俺の背中から降り、門番に話しかける。腰はもう大丈夫なのだろうか…。

「この人はあたしのツレで、まだカードを持ってないので。」
そう言って自分のカードを渡す。

俺たちは街に入る。

。

「おお、結構活気があるんだな。」

街は最初に入ってすぐの所は、建物などがあるだけだったが、進むにつれて店などが現れはじめた。

果物や野菜などを売ってる店。レストランのようなものもある。

「で？ ヤマトは今日どうするの？」

「どうするって何が？」

「泊まるところか。」

忘れてた…。

「シャル、お願いがある。」

「な、何よ？」

俺の真剣な顔にシャルがたじろぐ。

「金貸してくれ…。」

「…：…持っていないの？」

「ああ。銅貨一枚持ってない。」

気づいた事がある…。神に飲まされたメモ帳はどうやら俺に、基本的な知識を教えてくれているらしい。

金の単位は、銅貨が百枚で銀貨、銀貨が百枚で金貨、金貨が百枚で白金貨というものらしい。

ようするに、銅貨が一円、銀貨が百円、金貨が一万、白金貨が百万と言ったところだろう。

「はあ、まあいいわ。今日は家に泊めてあげる。」

「マジ？悪いな。」

そこから少し歩いた所に、立派な屋敷があった。シャルは躊躇する事なく、扉を開ける。中には、メイドさんの様な人がいて、口々に“お帰りなさいませ”と言っている。

「でっかい家だな。俺だったら落ち着かないぜ。」

「そう？確かに普通の家よりは大きいけど、そこまでかしら。」

「いえいえ、十分大きいですよ。」

いつのまにかメイドさんが一人ついてきていた。

「エイス、ただいま。」

エイスと呼ばれたメイドさん。茶色のロングヘアーを揺らしている。顔は…普通に可愛い。

「お帰りなさいませ、お嬢様。そちらの方は？」

俺の事だろう。

「ヤマトだ、よろしく。」

「エイスです。よろしくお願いします。ふふっ、それにしてもお嬢様が男性を連れてくるなんて。」

「ただの友達よ。」

「そうですか。」

エイスはクスクフと微笑んでいる。

「では、ヤマトさんは友人という形でよろしいでしょうか？」

「そう言ったじゃない。」

エイスはこちらを見て微笑んだあと、ではとついてくるように言った。

屋敷のある扉の前で止まりノックをする。シャルは返事も聞かず扉の中に入る。

「ただいま、お父様、お母様。」

そう言いながら俺を中に引っ張る。中には大きなテーブルと二人の人物。

「お帰り、シャリウエル。」

そう言ったのは二人のうちの一人、女性であるこの人はシャルの母親だろう。

「ふむ、どこへ行っていた？」

この人は父親だろう。思いっきり貴族って感じのする、ダンディなおっさんだ。

「コルンの森よ。望み通り、クリスタルをとってきたわ。」
そう言ってポーチの中から出した結晶を見せる。

驚愕する二人。

「本当にとってきたのか。なぜだ？なぜそこまで、結婚を拒む？」

「言ってなかったけど、実はあたし、あの人嫌いなの。それにあたしには夢があるっていったでしょ？結婚なんて出来るはずがない。」

親父さんはむうと唸っており、母親のほうは、さほど驚いていなかった。

てか俺場違いじゃね。

「ふう、わかった。結婚はまだいい。それにしてもお前にそこまでの決意があったとはな。」

「決意はあったけど、死にそうになったわ。で、この人が助けてくれたの。」

シャルの両親の4つの目が同時に俺を射抜く。

「そうか、感謝する。して、君の名前は？」

シャルママも頭を下げてきた。

「ヤマトです。あと気にしないで下さい。当然の事をしたまでですから。」

ちょっと善人を気取ってみる。

「それで、助けてくれた御礼って事で、今日泊めてあげたいんだけど……いい？」

「ふむ、いいだろう。夕食はまだかね？ まだだったら、森の話を聞くついでに、用意させよう。」

親父さんは想像してたより優しかった…。

その後、シャル一家と夕食を共にした俺は、フロもいただいた後、エイスに連れてってもらった部屋で就寝した。

第七話

街は寒い…………

コンコン

ノックの音で俺は目を覚ます。目に入るのは見た事のない部屋…。

「はい？」

「失礼します。」

そう言ってエイスが部屋に入ってくる。そこで俺は思い出した。昨日はシャルの家に泊めてもらったことを。

「おはようございます、ヤマトさん。」

「おはよう。」

「朝食の御用意がなされています。顔を洗った後、声をおかけください。」

ではと言って、エイスが部屋の外にでる。

俺は部屋にある水道で顔を洗い、貸してもらった服を着替え、俺が元々着ていた服を着る。俺が着ていたのは黒いチノパンに長袖Yシャツという格好だ。因みにネックレスとチェーンといった小物もついている。何故かこちらの世界は、意外に文明が進んでいることがわかった。多分電力などの代わりに魔力を使っているのだろう。ミシンなど服を作る機械もあるらしい。なので、俺の格好はそこまで

珍しくない…。

俺は首を鳴らし、外に出るための扉を開く。

その後、朝食もいただき、俺はエイスにシャルの部屋に連れて行ってもらった。

「シャル、ちょっといいか？」

扉をノックし、返事を待つ。

「うん、いいわよ。」

扉を開ける。

シャルの部屋はピンクの印象が強い部屋だった…。意外にフリフリな物もあった。
ファンシーすぎじゃね…？

「そこ座って。」

部屋にある椅子を指さす。

俺は黙ってそれに腰掛ける。

「で？どうしたの？」

「報酬の話だ。質問に答えてくれるか…？」

シャルはいいわよと言って俺に話すよう促す。

「まず一つ目だ。みんなどういった仕事をして、金を稼いでいるんだ？」

まず俺でも出来る仕事を見つけないきゃ話にならん。

「仕事はいろいろあるわ。自分でオリジナルの仕事始める人もいるし。でも基本的に旅人名乗るんだったら、商人になったりとか、冒険者ギルドで稼いだりするとかするわ。あ、あとはトレジャーハンターとかもいるわね。でもそういった職業は技術がいるし、危険だってある。技術といったら王国に仕えるのもいいかもね。給料は安くないし、なにより安定してる。」

「領地とかあるの？」

「もちろん。領地を貸して、お金を稼ぐのもありね。うちはそうだし。」

ギルドか…よさそうだな。

「ふーん。だいたい分かった。じゃあ次は国について。」

「国について？国はこのガンマインでは五つあるわ。まず、あたしたちが居る国はベンガルファйм王国。この街はちよつと孤立してるんだけど、この国に属する。あとは、中立国ナグマとシンフォス王国にガンシールっていう魔の国って言われているところ。最後に謎の国と呼ばれるミズキ国。」

その後もシャルは話し続ける。まず、国の配置。ナグマ国を囲むように4つの国がある。右上がベンガルファイム、右下にシンフォス。ナス海と呼ばれる海を挟んで左上にガンシユール、左下に広い海を挟んで、ミズキ国。ナグマ国とベンガルファイムは仲がいいらしい。だが、シンフォス王国とガンシユールにミズキ国はあまり協調性がなく、特別仲良くというのはないようだ。ナグマ国は中立国と呼ばれるだけあって、技術が進んでおり、大きく発展を見せる国ということ。

ベンガルファイムとシンフォスは物資。ガンシユールは色々な種族が混じっており、魔王と呼ばれる魔人屈指の実力を持っている者が収めているらしく、武力派の国である。ミズキは広大な海である、シューマ海を挟んでおり、情報があまり無いらしい。ベンガルファイムも調査のため人員を派遣したのだが、大きな波のせいで進めずにおわったそうだ。

正に謎の国と呼ばれており、知っているのは、国王の事だけらしい。過去に五ヶ国会議というものを行ったらしく、その時に国王とその側近を見たという話だ。

あと今現在、国同士の戦争などはないようだ。国同士ののは、だが。国の中での戦乱は多々あるらしく、国王も頭を痛めているという。

シャルに世界について一通り教えてもらった後は、過去の大きな出来事や、学校などの施設があること等を聞いた。

「それにしても、本当に何も知らないのね。ビックリしたわ。」

「ちょっと事情があつてな……。ありがとな、色々教えてくれて。あつ、泊めてくれたこともな。……よし、俺はもう行くかな。親父さんとお母さんによろしく言つといてくれるか？」

「それはいいけど……。ヤマトはこの街にいる気はないの？別にこの家にいてもいいんだけど……。」

「残念ながら俺は旅人っていう設定だからな……。」

「設定……？」

「まあ、いいや。見送りはいらねーぞ。また縁があつたら会おうぜじゃあな。」

そう口早に言つて俺は、部屋を出て、屋敷も出る。ああ、エイスも居たから挨拶しておいた。

「ふう。」

この国では今の季節は結構寒く、俺の服装では少し物足りない……。風が吹き付け、俺の体を寒さが蝕む。

（やっぱり……一人のほうがいいな……。）

俺は手をポケットに入れ寒さを和らげる。

（人は暖かすぎる……。）

それから、十分程歩いたろうか、王都に行くための門を見つける。門番は、同様にだらけており、この街が平和だという事がよく分かる。街は入る時には証明書のようなものがあるが、出る時はいらないらしい。

俺は、門に向かって歩き出す。

「待ちなさいよ！」

「ん？」

俺は声がしたほうに体を向ける。

シャルが立っている。息が荒く、走って来たのだろうと思った。シャルは暖かそうな格好をしており、リュックサックを背負っている。

「見送りはいらねーって言わなかったっけ？」

シャルの格好に疑問を持ちながらも、問いかける。

「ハアハア…あなたは常識知らずよ……。」

「わかってるよ……。」

「あなたはお金を持ってないわ。」

「それもわかってるよ。」

「今はかなり寒い季節よ…。」

「確かにな…。」

シャルは俺に近づき、黒いマフラーを巻いてくれた。

もう俺は分かってたのだろう…。シャルの言わんとしてる事を…。

「あたしがいれば、全部解決ね…。」

涙腺が悲鳴をあげる。目が潤んでくる…。

「ああ、お釣りがくる程な…。」

鼓動が加速する。

「あたしの意味は分かっていると思うけど…あなたの意味はどのような？」

シャルは俺に優しく問いかける…。

俺は…独りだった…。本当は寂しかった…。人に…かまっても
らいたくて…避けられたくなかった…。

でも俺は、人にすぎるのをかつこ悪いとっていて、特別だから、
他と違うから…離れていくのはしょうがないとっていた…。ただ、
無心に、クールを装い体と感情を分けるように生きてきた…。

「シャ、シャル。」

声が震える。涙が止まらない。悲しいわけじゃない…悔しいわけじ
ゃない…ただ…。

「俺と…一緒に…き、来てくれるか？」

嬉しかったのだ…。

「まあ、そんな事言わなくても無理矢理ついていくつもりだったんだけどね。」

言ってくれるシャルが嬉しくて…俺を見てくれるシャルが嬉しくて。

俺はシャルに抱きつき泣いた…。

何も言わずシャルは俺の背中に手を回し、背中をさすってくれた。

その日、俺は約四年ぶりに人の温もり、暖かさを感じた…。それは俺が今まで怖くて、手をだせなかったものだ。

体は寒く、指先は感覚が薄れてきている。

それでも感じれる、手の中の温もりを…。俺は絶対に離さない…損なわないと…そう、強く誓った…。

第七話 街は寒い……………（後書き）

バトルが欲しい方々、申し訳ありませんm（―――）m
でも、これは作者が主人公に必要だと思った事です…。人には誰しも弱さがあるというコンセプトで書きました。これで主人公に愛着が湧いてくれるといいんですが……。

バトルもこれから出していきますので、暖かい目で見守っててください。

第八話

シャリウエル視点

（シャリウエル視点）

ヤマトを家に泊める事になった。それにしても、銅貨一枚も持っていないなんて…。

絶対に怪しい…。それに旅人って言っても転移魔法を使えるなんて…。それに、グリズリーを倒した強さ。あれは絶対普通の旅人じゃない…。

まあ、でも悪い人じゃなさそうだし…いつか。

ヤマトをお父様とお母様に紹介した。あたしを救ってくれた人として。

泊めてもいいか聞いたけど、心配はいらなかったみたい。夕食の席ではお父様もお母様も、ヤマトを気に入ったようだ。

その後は、知らないが普通に寝たのだろう。

あたしは部屋で不思議に思った。

（どうしてこんなにヤマトの事考えてるの？）

あたしはなんかモヤモヤした気分のまま、ベッドに横になった。

。 。 。

翌朝いつものように、エイスが起こしに来た。あたしは起きて櫛で髪を整える。

朝食も昨日のメンバーで食べた。お父様とヤマトは食事中楽しそうに談笑していた。

朝食を食べ終わり、部屋にもどって少し経つと部屋の扉がノックされた。

「シャル、ちょっといいか？」

ヤマトの声だ。あたしはベッドから上半身を起こす。

「うん、いいわよ。」

扉が開き、ヤマトが入ってくる。

「そこ座って。」

あたしは椅子に座るように促す。ヤマトは黙って椅子に座ったが、何か納得いかない顔をしていた。

「で？どうしたの？」

あたしは聞く。

「報酬の話だ。質問に答えてくれるか…？」

あたしはいいいわよと言って話すよう促す。

それから、いろんな話を話した。国の事や仕事の事。他にも色々な。

あたしはヤマトがなんにも知らない事にビックリしたことを言った。するとヤマトは。

「ちよつと事情があつてな…。ありがとな、色々教えてくれて。あ

っ、泊めてくれたこともな。」

事情とは何だろうか。記憶喪失とか？いや、なんか違う気がする。そういった事を考えていると、間を開けてヤマトが言った。

「よし、俺はもう行くかな。親父さんとお母さんによろしく言っといてくれるか？」

え？もう行くの？

「それはいいけど…。ヤマトはこの街にいる気はないの？別にこの家にいてもいいんだけど…。」

何故かこのまま離れたくはないと思った…。

「残念ながら俺は旅人って設定だからな…。」

「設定？」

よくわからない事を言っている。

するとヤマトが早口で話し始める。

「まあ。いいや。見送りはいらねーぞ？また縁があったら会おうぜじゃあな。」

そう言って逃げるように部屋を出て行く。

あたしは見た。別れをいう時、ヤマトが一瞬だがとても悲しそうな顔をしたのを。

(なんて顔してんのよ……)

あたしは胸が痛くなるのを感じた…。

それと同時に、両親の部屋に向かうため走り出す。

扉を開き、両親の顔を確認し、言った。

「お父様、お母様……話しがあります…。」

。

。

。

部屋で前から用意しておいた旅の荷物を持つ。

クローゼットを開け、羽織るものを探す。コートを着込み、マフラーを巻く。

あたしは屋敷を出た……。

外に出ると同時に寒さが襲ってくる。

あたしはヤマトの事を考えていた…。

（あんな薄着じゃ、風邪引くじゃないの！）

黒いズボンにシャツ。この季節には合わない。コルンの森は、なぜか年中暖かいので野宿も出来るが、街は四季があり、今は冬だ。

あたしは走る…。それと同時に焦燥感が襲ってくる。
(コルンの森には行かないだろうし、多分王都よね…。)

あたしの脳裏に焼きつくのは、別れ際のヤマトの顔。

諦めたような…。それでいて、苦しそうな顔。

嫌だと思った。もっとヤマトの事を知りたいと思った。

「ハアハア、」

久しぶりに走ったからか、口の中がカラカラになり、足が痛い。
自分の走る速度に嫌気がさす。

(もっと…。もっと速く。)

街の門が近づくにつれ焦りが高まっていく。

「っ！」

門に近づくヤマトを見つけた。

「まっ、ハアハア」

声が上手く出ない…。
それでも振り絞って言った。

「待ちなさいよ！」

走ったせいで、体が痛むが、心は安心しきっていた。

「見送りはいらねーって言わなかったっけ？」

ヤマトが言う。驚いているが、どこか嬉しそうな顔。
呼吸がしにくいのが、鞭を打ち付け言う。

「ハアハア、あなたは常識知らずよ…。」
国の名前すら知らない…。

「わかってるよ…。」

「あなたはお金を持ってないわ。」
それこそ、銅貨一枚さえ。

「それもわかってるよ。」

「今はかなり寒い季節よ。」
シャツ一枚じゃ、辛い季節…。

「確かにな…。」

あたしはマフラーを外し、ヤマトに近づく。

ヤマトの吐く息は白く、あたしの心を揺らした。

黒いマフラーを首に巻いてあげると、ヤマトはあたしの目をまっすぐに見る。

そして、あたしは溜めを作り、言った。

「あたしがいれば、全部解決ね…。」

ヤマトの顔が歪む。

「ああ、お釣りがくる程な…。」

ヤマトは今にも泣きそうだが、聞いておかなければならない事がある。

「あたしの意味は分かっていると思うけど、あなたの意思はどのような？」

これは大事なことだ…。

ヤマトは何かを考えているような顔になった。次第に涙が零れ落ち。

「シャ、シャル。」

少しの間を開け、ヤマトが言った。

「俺と…一緒に…き、来てくれるか？」

あたしは嬉しくなった。求められてるのがわかった。

「まあ、そんな事言わなくても無理矢理ついていくつもりだったん

だけだね。」

そう、ヤマトが断ろうが関係なかったのだ。
あたしは絶対に着いていく気だった。

そんな事を思案していると、急にヤマトに抱きつかれた。あたしの顔の横で、呻く声がする……。

少し触れたヤマトの手はとても冷えているのが分かった。あたしはヤマトの背中に手を回し、さすってあげる。

そうすると、より一層抱きしめる力が強くなる。

街は寒く、彼は冷たい……。

あたしを温めるのには、厚着に着込んだ服があるけれど……彼にはそれが無い……。

だったらあたしが暖めてあげようと……そう……思った。

第九話

王都が近い

俺は今、街から王都へと続く道路のような場所を歩いている。見る限りでは辺り一面360度草原……。もうかなり歩いているが街には着かない。

話では、あと一日かからないらしいが……。

その前に……。

「ヤマト、足が疲れたわ。少し休憩をいれない？」

シャルが言う。

「あ、ああ。」

俺とシャルは脇の草原に座る。今は昼で太陽がポカポカと照りつける。

シャルが俺のそばに寄ってくる。肩は密着していて、はたから見たら恋人同士のようなのだ。

「近い……。」

シャルは水筒のような物をカバンから出し、コップのようなものに注ぎながら言う。

「何か言った？」

コップを俺に渡す。

「いや、なんでもない。」

あの時俺はシャルに自分の弱さを見せた…。ガキみたいな泣き顔を…。あれからシャルは俺によく接触するようになり、距離感もかなり縮んだような気がする。

それにしても恥ずかしい…。今すぐ地面で悶えたいくらいだ…。女に泣いて縋りつくなんて、どんだけ女々しいんだよ…。

（俺、あんなキャラじゃないんだけどな…。）

俺は心の中で考える。

「じゃあ行こっか。あと少しで王都につくと思うし。」

俺はああと言って立ち上がり、腰を捻る。パキパキと小気味いい音がして、少し楽になる。

道に戻り再び歩き出す。

王都に着いたのは次の日の朝だった……。

第九話 王都が近い（後書き）

次回から王都です。

それにしても20話ぐらいまでは毎日更新しようと思ってたんですが、夏期講習が忙しくて……。

読者の皆さん！出来るだけ投稿の間隔は開けないようにしますので、これからもよろしく願いますm（．．）m

主人公とヒロイン紹介

（主人公とヒロイン紹介）

【志波大和】

身長174cm。筋肉質の身体。長い黒髪に切れ長の瞳。年は16歳。

好きな食べ物は、ミカン。

妹が一人と両親の4人家族。

地球では、天才、鬼才と呼ばれていた。

本人は勉強を一種の作業だと思っていて、好き嫌いの観点がない。

性格は冷静な方で、どちらかというと、他人に冷たい方。

だが、親しくなった人間には、接し方は柔らかい。

とある事情により、シャリウエルを意識している節がある。

地球で幼馴染を助け、代わりにトラックに跳ねられ、絶命した。

その後、神々の厚意により、異世界ガンマインで生きていく事になる。

その力は異常なもので、神の加護により身体能力を爆発的に上げる事ができる。だが、通常時での身体能力も多少上昇していて、アスリート並みの動体視力と筋力を持つ。

特殊保有スキルを3つ所有している。

現在、ベンガルファーム国王都にてシャリウエルと行動を共にしている。

【シャリウエル・ローズ・アルガータ】

昔、国王の側近を務めていた男、ヴァイク・ローズ・アルガータ侯爵の愛娘。

身長166cm。絹糸のような水色の美しい長髪。スラリとした肢体に数多の男を魅了する、絶世の容姿。バストは82と控えめなのを本人は意外に気にしている。

気位が高く、自分が貴族の娘だと重々承知している。

魔法の才に秀でているが、現時点ではあまり発揮できていない。

変革濃度という特異体質を持ち、稀に魔力濃度が大きく変化する。

水属性の魔法が得意。

嫌いな婚約者と結婚するのを拒み、コルンの森にクリスタルを探りに行った。

そこで、コルンの森の魔物、グリズリーマザーに襲われているところ、通りかかった大和に助けられる。

それから、大和と行動を共にし、助けてもらった事などで、大和に好感をもっている。

街を出て行こうとする大和に突っかかって行き、結局一緒に旅をする事になった二人は現在王都にいる。

王都到着

「ギルドへ」

ガヤガヤとうるさい人々の喧騒の中。
一組の男女は肩を並べて歩いていた。

「流石に王都だな……。あの街も結構活気づいてると思ったんだけど、やっぱり別格だな……。」

今現在俺とシャルは王都の繁華街らしき所を歩いている。
王都には今朝到着した。今は昼時で、昼食を食べるという名目で繁華街に出向いている。

「そりゃそうよ。ここは王族や貴族が数多く住んでるし、お金がよく回るからね。その分、街が発展しているのよ。」

見渡せば、色々な店がある。武器屋に防具屋。果物や野菜、料理の材料を売ってる店。アクセサリーショップのような物や、服を売ってる店なども沢山ある。終いには、花屋や占いなどもあった。

ふーんと俺は生返事をして、街ゆく人達に目を向ける。

（王都か。楽しくなりそうだな。……ん？）

俺は衝撃を受けた。

俺の目に止まったのは、三人組のメンバー。

男二人に女一人。そこまでは普通だ。見渡せばいくらでもいる。だが、違うのだ。そいつら三人には……動物耳があったのだ……。

しかも女の耳はあれだった！

ニャーン

俺は頭の中で猫の鳴き声がBGMとなって鳴り響いた気がした……。

（スゲー破壊力だ…。）

「ヤマト？ どうしたの？」

シャルが心配したような瞳で、俺の顔を覗き込んで来る。

「いや、何でもない、何でもないんだぜ！」

「それならいいけど、何か顔がニヤついてるわよ？」

ハッ！マジか？俺は内心焦りながらも、“冷静”を装う。

「どうしたんだ、シャル？ 変な事言うなよ。お、お前こそ、疲れてるんじゃないか？」

多分今の俺の顔は、自分で言うのも何だけど凄い不自然だと思う……。

「ん。そうね。あんなに歩いたの久しぶりだったし、疲れてるのかも…。」

シャルは自分の肩を軽く揉みながら言う。

因みに俺は全然疲れていない…。体はまだまだ動く。

どっちかって言うと、精神的に疲れていたが、今さっき回復した。

「何だ？本当に疲れてたのか。大丈夫か？」

「うん。でも出来るだけ、早く寝たいわね。だから早く昼食食べて、宿に戻りましょ。」

シャルはそう言うが、実際かなり疲労しているのだろう。

心なしか足取りがフラフラしてる気がするし…。俺は心配する気持ちを胸に、シャルの隣を陣取る。

シャルと俺はまた歩きだす。

。 。 。 。

俺とシャルは結局いい店が見つからず、宿屋の食堂の様な場所で昼を済ませた。

その後、シャルは疲れを取るために寝ると言って、自分の部屋に入ってた。

俺たちがとった宿屋は、値段もそこそ安く、設備も充実していて、オマケに部屋が広い。

因みに金はシャルに貸してもらってます…。

シャルもいなくなり、いよいよ暇になった俺は王都を散策する事にした。

宿屋を出て、左に行く。

大通りを歩いていると、人が溢れかえっており、大変息苦しい…。

大通りを少し歩くと、人混みも薄れ、だいぶ歩くのが楽になった。そのまま、店など、面白い物がないか探していると、ある施設を見つけた。

建物には剣や盾、杖などの模型が装飾されている。そう、見つけたのは冒険者ギルドだ。

俺は昂る思いを抑え、建物に向かい一直線に歩いていく。

ドアの取っ手を掴み開け放つ。

ガチャ

「おお…。」

俺は、ギルド内を見回す。

中は思ったより綺麗で整頓されていた。

入って右側に机やら椅子やらが有り、奥には本棚などもある。

俺は昼間にも関わらず、大の大人がどんちゃん騒ぎしてるのかと思
ってたが、どうやら違うらしい。

多少は人がいるが、みんな結構真面目そうだ。

俺は左側にあるカウンターの様な所に歩を進める。

カウンターには一人の女性がいて、何かの書類を漁っている。

俺はその人に近づき、話しかける。

「あの、すみません。」

「あ、はい。なんでしょ？」

「ここってギルドの施設ですよね？」

「そうですけど？」

「ギルドの事について、教えてもらっていいですか？」

そう、まずは情報収集からだ。

なんにも知らずに手続きするなんて、そんな無鉄砲な事は俺には出
来ない。

「ギルドの事ですか？…あゝわかりました。特に聞きたい事など有りますか？」

「いや、別にないです。浅くで良いんで、基本的な事は全部教えてくださいませんか？」

「はい、わかりました。ではまず――。」

受付嬢らしき女性が話し始める。

「――という訳です。他にも――。」

それからも受付嬢？は律儀にギルドの事について教えてくれた。

要約すると、こうだ。

まず冒険者ギルド。これは一種の組合…会のようなものから今の事業的なものになったらしい。

ギルドで仕事をするためには、ギルドカードを発行し入会したのち、依頼を受けてしか出来ない。

それと、冒険者にはランクというものが有り、低い方からD<C<B<A<Sとなり、Sランクになる人は、ごく稀で、世界で100人程度らしい。

だが、そのSランクにも上があり、これが、SSランク。人間兵器や国宝人、超越人などと呼ばれたり、一人に一つ、あだ名のようなものが絶対にあるという。

システムはランクが高くなるほど高位の依頼を受けれるというものらしい。

ランクが高くなると軍や、国立騎士団、近衛など、いい仕事をもらえたりする事もあるという。

他には、ギルドの依頼について。

まず、依頼を受けるといっても色々なものがあり、ただの草刈りから、ドラゴン討伐などもあるらしい。

討伐依頼や捕獲依頼、そういったものは命をかけるだけあって、かなり値が張るという。

それと相対して雑用の依頼などは報酬額が安く、だが危険の少ない仕事としてそれらだけで生計を立ててるひとも少なくないらしい。

あと、依頼を失敗したり、放棄したりすると違約金のような物が払わせられる仕事があって、これが意外に高めだという。

しかし、どうしようもない場合などは、ちゃんと証明できたら、違約金なども無効果出来る。

そう、普通のギルドだ。

言っちゃ悪いが本当に思った通りのギルドだった。

「……あの、ギルドカードって作れます？」

「はい、新規となるとカード作製は無料となります。ちょっと待っててください。」

受付嬢さんが早歩きで裏側？に入って行った。

数分後に戻ってきた受付嬢さんが何か箱の様な物を持ってきた。

「この中には、カードが入っていて取り出した人によって内容が変わる仕組みになっています。」

「ふーん。なんか便利ですね…どんな仕組みなんですか？」

「いえ、私達は知りません。これは先人が作った古代のツールと呼ばれていて、詳細はまったく不明なんです。」

「さすが、ファンタジー…。」

「?なんか言いました?」

「いえ何も…じゃあ遠慮なく。」

俺は腕を捲り、豪快に手をつ込んだ。

手で探してみると何枚かのカードがある事がわかる。

俺はコレだ!と思ったものを一枚取り出した。

「一枚取りましたか?ではそのカードをこちらにお渡し下さい。」

俺は鉄の板を見ないで受付嬢に渡す。

「:シバ・ヤマトさんですね?…あれ?称号が入ってる:。」

「称号?」

「はい。これは何でしょう…。:ヒーローって読むのかな?」
受付嬢は自信なさげに呟く。

「ヒーロー?」

HERO? エイユウ?

てかツールっていう単語があんのに何でヒーローはねーんだよ……。

「えっと称号って何すか? なんか意味あるんですか?」

なんか釈然としない…。

「称号と言うのは、他の人に付けられるあだ名と違って、その人が本来持つてる器や、望んでるもの。神様から与えられた役割とも言われています。……正直これについてもあまり知られてないんですよ…。」

じゃあ一種のバグっていう可能性もあるって事か…。

ハハ

俺が英雄って似合わない過ぎるだろ。

俺はそのままカードを発行してもらい、教えてもらってなかった詳細などを聞いた後、宿に戻るため歩き出した。

第一話

これからについて?!

コンコン

ドアを叩く音で俺は目を開けた。

正直にいうと、足音で気付いてたのだが。

「どうぞ。」

ガチャリとドアが開くと、現れたのは俺がこの世界で最もよく知る人間だった。

「ヤマト、ちょっといい？」

俺はベッドから起き上がり、ああ、と返事をするとき軽く背骨を鳴らす。

「あの時から、あんまりはつきり話してないじゃない？これからどうするのか。」

あの時とは多分あの時だろう。

わざわざ言うのは、野暮だ。
てか恥ずかしい。

「そうだな。でも折角長ったらしい道歩いて来たんだ。王都に滞在すんのも良いんじゃないか？」

「うーん、そうね。まあ、でも…。」

歯切れが悪いが何かあるのだろうか…。

そんなシャルを見てるとふと疑問が浮かび上がる。

「そういえば、なんでシャルは俺と一緒に行こうと思ったんだ？」

「ツツ！」

なんかめっちゃ動揺してるな…。

至極まともな疑問だと思ったんだけどな。

「べ、別に理由なんてどうでも良いでしょ。……直感よ！直感！」

直感？まあ、いいか。これから一緒に行動するんだ。いつでも聞けるしな。

俺は何故か嬉しくなり、つい笑みを作ってしまう。

「な、な、何、笑ってんのよ！ああ、もう！

もう、いいわ！とにかく王都にしばらくはいるのね！？」

早口でまくしたてるシャルに俺は肯定の意を示す。

「じゃあ、アレよ！もう、遅いから寝るわ！

お休み！」

ボタン！と音を立てて、部屋から出て行くシャルは、アイドルなんかより、まったくもって可愛かった。

「さて…どうなるかな。」

第二話 初めてのクエスト受注

宿から出ると、体を朝の寒さが襲う。
世間一般では着込む程の気温だろう。

俺にとっては、全然我慢出来るぐらいなのだが…。

さて、何故俺が朝早くから外に出て来たのか。

正直にいうと、何でもないただの散歩である。

俺は、欠伸をしながら朝の清々しさを一身に受ける。

そうやって歩いていると、俺はまだこの世界があの世界と違うモノ
だとは思えなかった。

異世界に来た…。

この世界に来てから、早二週間。俺は未だに自覚が持てずにいた。

本当はこれは夢で、瞬き一回する間に、住み慣れたあの部屋のベッ
ドに転移するんじゃないか？とさえ思っている。

この事はまだシャルにも言っていない。
信用していない訳ではないし、話したくない訳でもない。

ただ、踏み出せないのだ。
これまでも話そうと思った事は何回かあった。

でも直前になると、喉が詰まり、全く別の話題を提示してしまう。

「どうしたもんかな……。」「

俺は、空を仰ぐ。

「まあ、いいか……。その時がくれば自然に話せるはずだ。」

どんな存在かも分からないこの世界のお日様は、あの世界のより、一層眩しかった。

。
。
。

「うし！ シャル！ 今日こそギルドに行って来る！」

大和だ。

何でこんな事宣言してんのかというと、俺はこの一週間、ずっと本を読んでいた。

図書館で借りた本をガンガン読みまくった。

この世界は文字が基本日本語であり、たまに外来語が出てくると言う、果てしなくルーズなモノだ。

てかもろ現代日本文化だ……。

だが、一応英語もあるらしい……。

今では使われないらしいが。

まあ、そのおかげで本を読みまくれるのだから、感謝するべきだろう。

正直、英語なら全然良いが、全く知らない言語とかが出て来たら、諦めるつもりだった。

別に覚えようと思えば、覚えられるだろうが、それじゃ不自然すぎる。

旅人がいきなり、読み書きの勉強し始めたなんてなったら、いよいよシャルに怪しまれる。

まあ、もう充分怪しまれてると思うが。

そのおかげで、色々な事がわかった。
国の歴史や、その他諸々。

それにしても色々な事に驚かされた。
まず魔法。

魔法については、どっかの神様に飲まされたメモ帳のおかげで、基礎知識は持っていたが、いざ、調べてみると本当に訳が分からなかった。

結論から言うと、“魔力”とはこの世界での未知のエネルギー粒子
“魔素”の事を言う。

基本このエネルギーは魔素も総合されて魔力と呼ばれているらしい。

科学者共が揃って研究を投げる程の、本当に訳の分からん物質。

魔力についてわかってる事。

それはとにかく魔法という、奇跡を使える事…。

種類がある事。

人体に影響を及ぼす事がある事。

濃度が存在する事。

粒子を魔素と呼ぶ事…。

こんな未知の物質が日常的に使われているのは、ひとえに先人たちの言葉だろう。

未知であるがゆえに神秘とされた。

実際この魔力で悪も善もあったのだ。

人は、いい事を重点的に考え、この力に頼る事にしたのである。

魔法は人体や物体に眠る蓄積魔力と空気中に存在する純生魔力といったものを共鳴させる形で起こすらしい。

魔法には系統があり、基本的にはそれぞれ、火、水、氷、土、風、雷に分かれる。

だが、高位の魔法となると、闇、光、幻、時、空といった属性もある。

そして魔法を使うのに、この上なく必要な物。

それが精神力である。

今では根性や苦痛に耐える力として使われているが、元々は一点に集中し、氣力を高める力と言われていた。

この一点に集中するというのが魔法を使うのに、大切な事だという。

まあ、ひとえに取り合えず、魔法を発動したい、とかあれを燃やしたい、といった意思が必要という事。

あとは魔力の種類。

さっきも言ったが、“蓄積魔力”と“純生魔力”。

こういったものの事をいうのだが、他にも種類はあるらしい。

シャルの魔力は多分そう言ったものだろう。

あと魔力薬に魔法具。

魔力についてはこんなものだ。

あとは精霊やら何やらが存在する事……。

特殊スキルと言った、魔法とは違う力を使える人たちの事。
各国のパワーバランス…政治の仕組み……

一週間とにかく勉強？をやった。

そのおかげで、随分この世界の事にも強くなったと思う。

「ギルド？何しにいくの？」

シャルが紅茶を飲みながら、質問をして来る。

「え…依頼だけ。」

「…ふん。でも何でわざわざあたしに言ったの？」

「…いや、なんとなくだけど…」

「なんとなく？……まあ、いいわ。それじゃあ、あたしも着いて行く事にする」

シャルが飲み終わったカップを置き、出口の方へ歩いて行く。

「え？ついてくんの？」

俺が質問をすると、足を止めたシャルはチラリとこちらを見ていった。

「暇なのよね…」

一言そう言うと、シャルは俺の部屋の扉を開け、何でも無いふうに出た。

。
。
。

ガチャリ

一週間前に触ったのと同じノブを、俺は気合充分に開け放つ。

ドアについているのか、チリリン、と鈴の音が鳴り、耳に中々心地よく響く。

「でもなあ、シャル。俺がギルドで依頼をこなそうと思ったのは、お前に金返すためなんだぜ？」

「ふーん。そうなんだ。」

シャルは興味なさそうにクエストボードを見つめている。

「そうなんだ、って……はあ。まあいっか。」

俺がうなだれていると唐突にシャルが聞いてきた。

「そういえば、ヤマトはランクは？」

「ランク？俺のはDだけど？」

「クエスト受けるの初だっけ？…うーん。じゃあ、難易度低いのか
らやらないといけないかも…」

「シャルはランクは何なんだ？」

「ん。一応B。」

「結構高いな…。」
何となく凹む。

「ああ、でもBランクに昇級すんのはあんまり難しくないわよ？そ
もそも、ギルドなんかあんまり利用しないあたしがとれてるんだか
ら、ヤマトなら全然大丈夫。」

「うーん。そんなもんか？」

「そんなもんよ。」

俺たちはクエストを探す事にした。

昇級の方法。

それはそのランクの昇級クエストと言ったものがあるらしく、その依頼を達成する事で、ワンランク上がるという。

それか、クエスト外、集団クエストなどで強力な魔物を狩ったりしても上がるらしい。

依頼を達成したのち、ギルドで上げてもらうのではなく、勝手に上がっているという、なんとも訳の分からないシステムだ。

あとは飛び級など…

「うーん。昇級依頼は確か一人じゃないと受けられないのよね…よし！じゃあ、これいっとく？」

シャルが選別してくれたクエスト。
ランクBクエスト。

【ガルラの討伐】

ガルラとは鳥類型の魔物で風系統の魔法を使う、結構厄介なやつらしい。

なんでBランクかというと、おれはDだとしても、シャルはBであり、クエストを受けると集団クエスト扱いになるからだ。

集団クエストはメンバーで一人でもそのランクの人間がいれば、他の人は関係なくそのランクの依頼を受ける事が出来る。

「風の鳥ガルラか……いいぜ、狩ってやろーじゃねーか！」

俺は“討伐”という言葉に感化され、テンションはもう冒険者だ。

「なんか、気合入ってるとこ悪いけど、武器は？防具は？魔法薬とかは？」

沈黙が数秒続いた。

「……ひ、必要ないぜ!!」

「…そう？まあ、グリズリーを生身で倒せたんだから、心配ないかもね。」

ああ、そうだったな。

「…グリズリーと、ガルラではどっちが強いんだ？」

「ガルラの方が上ね。グリズリーは筋力とかをみれば危険だけど、魔法は使ってこないし。」

「なるほど、確かに魔法は強力だな…。」

うーん。その点ではやっぱり防具とか付けた方がいいのかな…。

「まあ、ものは試しよ。Bランクだし、そんな無茶なのは出てこないはずだし。」

結構適当だな…

「…まあ、いっか。そうだな。とりあえず殺ってやるぜ！」

俺とシャルは依頼書をカウンターに持って行き、集団クエスト扱いで受注した。

【ガララの討伐】

鳥類型魔物ガララ一匹の討伐

ベンガルファイム王都西、ライル草原

報酬額：銀貨80枚

違約金無し

依頼主：ベンガルファイム王国ギルド

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8917v/>

異世界英雄物語

2011年11月2日20時44分発行